ケニア・ナイロビにおける臨床研修

期間： 2007 年 11 月～12 月

長崎大学熱帯医学研究所が平成 17 年から取り組んでいるケニア感染症研究プログラム、及び熱研内科が提供する海外研修期間を利用して、2007 年 11 月から 2 ヶ月の間、ケニアのナイロビにおいて Mbagathi District Hospital と Gertrude's Children's Hospital で臨床研修を経験した。

ケニア・ナイロビは東アフリカに位置し、比較的安定した治安と高地による温暖な気候を背景に、東アフリカの政治・商業の中心都市として発展してきた。一方近年では職を求めて地方から人々が流入し、人口集中による治安の悪化や貧富の差が顕著化している。

Mbagathi District Hospital はベッド数約 200 床、ナイロビで唯一の県立病院である。東アフリカ最大のスラム街、キスム均衡に立地することから毎日お金に余裕のない人々が地域の相互扶助制度(ハランビー)を利用して、外来通院・入院してくる。また病院敷地内には NGO 団体である MSF(国境なき医師団)と協力し、無料で HIV 治療を受けられる外来診療施設を提供している。診療行為の大部分は医師不足のため、看護師と医師の役割を併せ持つ準医師によって行われ、診断は主に身体所見と問診によってなされる。入院病棟では HIV に関連した結核や髄膜炎、悪性腫瘍等を多く認める。

内科病棟回診の風景、医師 1 人に準医師がついて治療方針を確認する

一方で Gertrude's Children's Hospital は主に外国人等の裕福な患者層を対象とした私立小児病院で、80 床のベッド数に対して 28 人の医師が勤務する。日本や欧米の病院と比較しても遜色のない清潔な施設で、対象疾患も HIV や結核等の熱帯感染症は少なく、下痢症・中耳炎・急性上気道炎等が一般的である。

写真左：病院玄関の建物　写真右：病院中庭にある公園

今回ケニアでの経験を通じて、アフリカの同一都市においても医療施設や疾病構造に格差が存在することを理解することができた。また臨床医としての役割や限界についても考えさせられた。熱研内科では今後も海外で熱帯医学に関連した活動をするにあたり、熱帯地域の現状を理解する手段として海外での臨床研修の継続が計画されている。